～産地拡大中！タキイの単為結果ナスPCシリーズ～

「PC筑陽」の栽培ポイント

ホルモン処理不要、トゲなしナスの特性を生かすために

ハウス内での越冬栽培が中心となるナス促成栽培では、着果促進剤（ホルモン処理）が広く施用されています。この作業は全労働時間の約30％を占める重労働といわれ、生産者の高齢化、後継者不足に悩む産地にとって、ホルモン処理の省力化が求められていました。

2017年に発表した「PC筑陽」はホルモン処理不要の画期的なトゲなし長ナスで、長ナスの本場九州の産地からも高い評価を受けています。省力化に加え、その品質のよさが漬物加工業者などからも注目され、九州だけでなく各地の作型で導入が進んでいます。

初期の株作り
若苗定植、強勢台木への接ぎ木、１番花の摘花、発根剤施用

最適環境の設定
夜温確保（厳寒期）、湿度確保（高温期）

草勢維持
早めの追肥、適正な潅水量、側枝切り戻しの徹底、Ｍ～Ｌサイズ収穫

圃場準備

強い単為結果性をもつ「PC筑陽」は、開花した花はすべて着果肥大することから着果負担が掛かりやすく、草勢を維持するには、通常よりも多くの水や肥料を要求します。水田土のような保水力のある土が最適ですが、畑地の場合でも、できるだけ深耕して十分に堆肥を施し、保水性を高めるようにします。元肥は通常品種と同程度の設計としチッソ、リン酸、カリをそれぞれ10ａ当たり成分量で20～30kg施します。

接ぎ木栽培

台木用ナスに接いでも単為結果性は発揮され、接ぎ木は土壌病害の回避と良品多収の手段として有効です。「PC筑陽」の着果力を最大限に生かすためにも、スタミナのある「トナシム」や「トルバム・ビガー」を台木にすることをおすすめします。

適期定植

１番花がまだつぼみの状態の若苗定植がベストです。樹づくりを優先させるため、定植後は１番花の摘花を徹底し、草勢が弱い場合はさらに２番花も摘花しましょう。なお、分枝花については適宜除去し１段１花の着果とします。生育初期には樹づくりとともに充実した根張りを促すことも重要です。活着不良や草勢が弱めに推移する場合は「発根剤」の施用も効果的です。

仕立て方

１株当たりの着果負担を軽減し４本仕立てよりも２～３本仕立て栽培がおすすめです。また、初期生育では草勢を落とさないよう主枝は立ち気味に誘引し、早く寝かして草勢を落とさないよう注意します。

↑活着不良時は発根剤の活用が有効。

↑初期の主枝は立ち気味に誘引する。

肥培管理

最初の収穫果が肥大してきたら早めに追肥をスタートし、その後も草勢を見ながら肥効が切れないよう連続的な追肥に努めましょう。1回当たりの追肥量は、液肥でチッソ量1kg／10a、粒肥では畝肩部にチッソ量2～3kg／10aを目安に施用します。一度に多量の肥料を施さず、施肥回数を増やすことで肥切れを起こさず、絶えず土壌中に根が吸収できるチッソ量を確保しましょう。

主枝・側枝管理

株の生長にともない、強い主枝から順に寝かせて誘引し各枝のバランスを調整します。また主枝の摘芯は7段前後で行い、できるだけ側枝の伸長を促します。着果肥大を促すために、側枝は第1花と上葉1枚を残して早めに摘芯し、収穫後は1芽残して切り戻します。芽の動きが活発な高温期にこの管理が遅れると、花数過多を招き草勢回復が難しくなります。

↑側枝は第１花と上葉１枚残して摘芯する。

↑「１芽残して切り戻し」を徹底する。

潅水

厳寒期でも定期的な潅水を行い、高温期は生育旺盛となるためこまめな潅水を心掛けましょう。また高温乾燥期は通路潅水も併用し、ハウス内湿度の確保に努めます。

↑高温乾燥期は通路潅水を併用する。

低温期の温度管理

厳寒期はハウス内の最低気温を14℃目安で保温に努め、日の出前から早朝加温で徐々に温度を高めながら午前中25℃を目安に管理します。

また、厳寒期は地温の確保も必要となり、小ダクトでの株元加温や潅水時の水温管理にも注意が必要です。

収穫サイズ

草勢低下時は2Lサイズ以上の大果収穫はなるべく避けましょう。安定出荷を目指すためにもM～Lサイズでの安定的な収穫が理想です。

↑定期収穫で草勢維持に努める。